

むくのきだより 1月号



令和8年1月7日 港区立赤羽幼稚園 園長 中村 美奈子



新年を迎えて

園長 中村 美奈子

年の初め、東京は穏やかな日和となりました。初詣や旅行、ご親戚に会いに出かけられた方、ご家族でゆっくり過ごされた方、様々かと思います。いつもは、ゲームで遊んでいる子供も、冬休みには、こま回しや羽根つき、凧揚げ、すがろく、かるた等々、日本の正月ならではの遊びをしたということもあるでしょう。冬休み前に、こま回しに挑戦していた赤羽幼稚園の子供たち。年少さくら組の子供たちは、初めてのこま回しなので、ひもをぎゅっとひっぱって回せるタイプのこまです。回ると嬉しそうにしていました。年長ゆり組の子供たちは、こまの芯にひもを巻き付けるのも上手になって、シュッと勢いよく投げながらひもを引いていました。角度やタイミングがうまくいくと、くるくる回りだすこま。難しいですが、回った時の嬉しさは格別で、周りの先生に満面の笑みで伝えていました。正月の遊びには、子供の元気な成長を願っているもの、縁起ものなどが多くあり、伝えていきたい日本の文化です。

羽根つきも子供たちにとって、難しい遊びですが、羽子板にうまく当たって、カーンと遠くに飛ばせたり、相手と打ち合えたりすると、楽しいものです。羽根つきは、室町時代に宮中の正月遊びであったものが、江戸時代に庶民にまで広がったそうです。井原西鶴の「世間胸算用」にも江戸の大通り筋の年の市で正月用の玩具と共に羽子板が売り出されている情景が描かれています。打ち合う「羽根」は、ムクロジの種子に羽根をつけ、蚊を食べるトンボに似せたものです。蚊退治、子供の疫病除けのまじないとして羽子板で羽根をついたのが「羽根つき」のおこりとも言われています。子供の健やかな成長を願う気持ちは、昔も今も変わらないのだと思います。江戸時代の中頃になると、押し絵羽子板が登場し、花・鳥・人気役者の押し絵がついた豪華なものが歳末の羽子板市で売り出されるようになりました。次の句は、羽根つきを詠んだものです。

羽子板の 重きが嬉し 突かで立つ 長谷川かな女



長谷川かな女は、明治時代に生まれ、大正から昭和の時代にかけて活躍した俳人です。正月に羽子板をいただいたのでしょうか。しかし、みんなが羽子板で遊んでいるのに、羽も突かずに立っています。それは、羽子板の重さが嬉しいと感じるほど立派な素敵なお羽子板だったのでしょう。大切に抱きかかえている子供の様子が、思い浮かびます。物があふれている現代ですが、この子供のように贈った人の思いも受け止め、大切に思う気持ちは共感できます。

幼稚園に入園した子供たちは、親と子の世界から、先生と子供、子供と子供の世界へと、人とのつながりを広げてきました。相手の思いを受け止め、自分の思いを伝え、温かいつながりが広がっていくように、教職員一同、力を尽くして参ります。保護者の皆様、地域の皆様には、旧年中、本園の活動に温かいご理解とご支援をいただき、ありがとうございました。本年も、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。